

論 文

本学大学1年次生の英語学習に対する動機

——国際教養学科と看護学科との比較を通して——

¹飯田 毅 ²成橋 和正 ³橋本 秀実
⁴佐伯 林規江 ⁵今井 由美子 ⁶高橋 玲
⁷若本 夏美

¹同志社女子大学・学芸学部・国際教養学科・教授

²同志社女子大学・薬学部・医療薬学科・准教授

³同志社女子大学・看護学部・看護学科・准教授

⁴同志社女子大学・学芸学部・国際教養学科・教授

⁵同志社女子大学・表象文化学部・英語英文学科・教授

⁶同志社女子大学・薬学部・医療薬学科・教授

⁷同志社女子大学・表象文化学部・英語英文学科・教授

Comparing Motivation Toward Learning English of First-year University Students Majoring in International Studies with That of Students Majoring in Nursing

¹IIDA Tsuyoshi ²NARUHASHI Kazumasa ³HASHIMOTO Hidemi
⁴SAEKI Namie ⁵IMAI Yumiko ⁶TAKAHASHI Rei
⁷WAKAMOTO Natsumi

¹Department of International Studies, Faculty of Liberal Arts,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor

²Department of Clinical Pharmacy, Faculty of Pharmaceutical Sciences,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Associate professor

³Department of Nursing, Faculty of Nursing,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Associate professor

⁴Department of International Studies, Faculty of Liberal Arts,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor

⁵Department of English, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor

⁶Department of Clinical Pharmacy, Faculty of Pharmaceutical Sciences,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor

⁷Department of English, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor

Abstract

This study aimed to compare motivation toward learning English of students majoring in international studies (IS) with that of students majoring in nursing (NU) at Doshisha Women's College of Liberal Arts. A total of 165 (87 IS students, 78 NU students) first-year students participated in the study. A questionnaire including an open response was employed in the study. Factor analyses produced the following five factors: "Interest in the English language and culture," "Ought-to L2 self and instrumentality (prevention)," "Passive attitude toward English class," "Ideal L2 self and self-efficacy," and "Anxiety about speaking English." Except for the "Anxiety of speaking English" and "Passive attitude toward English class" factors, IS students had significantly higher motivation than NU students. Next, qualitative analyses of the open question revealed that both IS and NU students wanted to have classes that would improve their communication skills despite the fact that approximately half of students did not write any comments. Finally, integral analyses showed that both students' groups' motivation rose after taking English class at the university. However, differences in motivation were found between IS and NU students in that the former studied English for various reasons, whereas NU students did so mainly because of preparation for entrance examinations.

1. 研究の背景

本研究は、研究プロジェクト「本学の教育理念及び Vision 150を活かした共通英語教育開発のための基礎研究」(English 2020)の目的の一つである本学で共通英語を受ける学生の英語学習の情意面に関する調査である。本研究の目的は、本学の共通英語教育を1年間受けた大学1年次生(看護学部)がどのような英語学習の動機を持っているのか、また今までにどのような動機の変化があったのかを同じ大学で外国語を学ぶ時間が多い大学1年次生(国際教養学科)との比較を通して明らかにすることにある。

グローバル化の進展とともに日本においても海外とのやりとりが増え、国際共通語としての英語の役割の重要性が多くの人々に共有されるようになってきている。文部科学省も学習指導要領の改訂や大学入学試験(英語)の変更等を通して英語教育の改革を推進してきた。しかしながら、大学入試共通テストとしての英語の民間試験の活用の混乱が示しているように、英語教育政策推進者、英語教育の実践者や研究者、英語教育を受ける一般の人々の間に英語教育の改革に対する考え方のズレが見える(飯田2019)。ここでは、大学における英語教育の現

状を大学英語教育の前提となる初等中等教育における近年の英語教育の変化と大学教育の環境の変化という両面から概観した後で、英語学習動機の先行研究を簡潔にまとめた。

1.1 新学習指導要領と高大接続

学習指導要領は、児童生徒の学びに大きな影響を与える。2017年、2018年に初等中等教育に関する新学習指導要領が発表された(文部科学省 2017a, 2017b, 2019)。外国語教育である英語教育は今回の改訂によって、今までにないような大きな変化が見られる。大学の英語教育を推進して行くためには、改訂の内容を理解した上で進めることが重要である。その特徴の主なものを挙げるとすると、以下のようになる。

- (1) 小学校中学年の「外国語活動」(英語原則)と高学年の「外国語科」(英語原則)が導入された。
- (2) 学習指導要領解説(2019)の付録8に見られるように「外国語活動・外国語の目標」が学校段階別一覧表に整理され、段階的に示されるようになった。
- (3) 「コミュニケーションを図る素地となる資質・能力」(外国語活動)、「コミュニケーション

ンを図る基礎となる資質・能力」(外国語)、「コミュニケーションを図る資質・能力」(中学・高校)の育成のように目標の表現が統一された。

- (4) 言語活動が5領域(「聞くこと」「話すこと[やりとり]」「話すこと[発表]」「読むこと」「書くこと」)に区分された。
- (5) 各領域の目標の話題が「日常的な話題」と「社会的な話題」に分割された。
- (6) 英語の授業は英語で行うという方針が引き続き採用された。
- (7) 文法事項として小学校にSVO等、中学校に現在完了進行形や基本的な仮定法用法等が入った。
- (8) 高校の科目名が「英語コミュニケーションⅠ/Ⅱ/Ⅲ」「論理・表現Ⅰ/Ⅱ/Ⅲ」に変更された。
- (9) 語彙数が小学校で600~700語、中学校で1600~1800語、高校「英語コミュニケーションⅠ」で400~600語、「英語コミュニケーションⅡ」で700~900語、「英語コミュニケーションⅢ」で700~900語と示され、全体的に増加した。

改定された学習指導要領の内容は、実際は教科書検定を通して具体化される。つまり、初等中等教育を担当する英語教員は検定済教科書を使うことで学習指導要領の内容が実行されるのである。しかし、(6)の項目のような授業に関する項目は教員次第であることは言うまでもない。

学習指導要領の改定に加えて、「グローバルに対応した英語教育改革実施計画」「生徒の英語力向上プラン」「英語教育強化地域拠点事業」「外部専門機関と連携した英語指導向上事業」「英語教員の英語力強化のための調査研究事業」等の各種の事業も同時に実施されている。つまり、英語教育の充実のための政策がより統一的に実施されてきているのである。

しかし、国の文教政策上での改革は進んでいるように見えるが、初等中等教育の実際の英語教育の現場を考えると、例えば「英語の授業は

英語で」という指針についても様々な意見の相違や実施の是非に関する根本的な議論があり、改革の方針が妥当であるかどうかを含めて、必ずしも改革が進んでいるとは言えない状況にある(例、阿部 2018、大津他 2013、斉藤他 2016、鳥飼他 2017)。

中等教育と高等教育を結びつける高大接続の観点から英語教育の問題を一つ取り上げたい。前述したように、大学入試共通テストに英語の民間試験を活用する問題である。この問題は、現時点では2020年1月15日に、第一回「大学入試のあり方に関する検討会議」(三島良直座長)の議論に委ねることになり、1年をめどに結論を出すことになっている。英語民間試験の導入の問題点を南風原(2018)は、以下のように指摘している。「開発目的が異なる試験の成績を『共通テスト』として互いに比較すること」(p.18)、英語入試改革については「二〇一三年四月の自由民主党の教育再生実行本部や経済同友会の、TOEFLの活用を、と言う提言から始まり、『英語教育の在り方に関する有識者会議』につながる流れがあった」(p.22)、としている。最後に、南風原(2018)は以下のようにまとめている。

「今回の改革案は、TOEFLの活用を、という声から始まった民間試験活用の強い流れが、システム会議での議論もなく、全体の方針として織り込まれたこと、そして国立大学については、自ら認識していた多くの課題の解決を確認しないまま、結論を急ぎすぎたことの結果であると考えられる。」(p.24)

1.2 大学を取り巻く環境の変化と学修者本位の英語教育

政府の進める近年の高等教育政策の中で英語教育と特に関連すると考えられるのは、グローバル人材育成であろう。政府は2011年5月にグローバル人材育成推進会議を設立し、翌年6月に審議のまとめとして「グローバル人材育成戦略」を発表した。その中で、グローバル人材の概念を整理し、英語教育の改革を唱えている。

現状の学生の英語力について、TOEFLの成績を取り上げながら語学力の低迷を指摘し、留学を通して英語力の強化を唱えている。文部科学省は2014年から「スーパーグローバル大学創世支援事業」を開始した。この事業は教育再生実行委員会の提言を受け、37大学を選び、今後10年間で世界大学ランキング100位以内に日本の大学が10校入ることを目指したものである。しかしながら、その目標は現在達成できない状況にある(刈谷 2017、刈谷・吉見 2019)。ここで重要なことは、グローバル人材育成教育において確かに英語教育は重要な役割を担っていると考えられるが、大学を含めて学校教育として実施されている英語教育の本来の目的は、グローバル人材育成に必要な英語力を持った生徒や学生を育てることではないということである。英語教育にはもっと広い目的がある(飯田他 2018)

一方、近年の日本の大学を取り巻く教育環境の変化は著しい。2018年11月中央教育審議会は、2040年における大学教育の展望と高等教育の目指すべき姿として、「2040年度に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」(2018)をまとめ、その中で「学修者本位の教育への転換」を掲げている。その中で、高等教育が目指すべき姿として特に以下の3点を取り上げたい。

- ・ 個々人の可能性を最大限に伸長する教育
- ・ 何を教えたかから、何を学び、身に付けることができたのかへの転換
- ・ 単に個々の教員が教えたい内容ではなく、学修者自らが学んで身に付けたことを社会に対し説明し納得が得られる体系的な内容となるよう構成することの必要性

上記の3点は確かに納得できるものであるが、具体性に欠ける。この答申の背景にあるのは、日本における少子化による大学入学者数減少の問題と世界中で起きている大学生獲得の状況である。この答申の狙いは、今後大学に入学する学生数が減少する中で、真の意味で、学修者本

位の教育をしないと大学は生き残れないというメッセージである。このメッセージは大学における英語教育についても言える。大学における学修者本位の英語教育の重要性を指摘していると捉えることができる。では、一体どのような英語教育を実施したら良いのであろうか。

日本学術会議(2010)は国際共通語としての英語教育として考慮すべき点として以下の3点を指摘している。

- i 言語とその文化的背景—この場合、アメリカやイギリスの文化—を区別し、言語に結びついている文化的負荷をなるべく軽くすること。
- ii 国際共通語としての英語は母語に根差しているわけではないので、母語の習得過程を学習のモデルとして強調せず、特に、いわゆるネイティブ・スピーカーを万能視しないこと。
- iii グローバル化した社会のコミュニケーションにおいては、情報通信技術の発展も相俟って、書き言葉が話し言葉と並んで、あるいはそれ以上に重要な役割を果たしている。それゆえ、音声言語と並んで書記言語(読み書き)の学習を重視すること。

(日本学術会議 2010、p.15)

上記のように国際共通語として英語のあり方は、今後の英語教育を考える上で示唆的であり、上記の方針にしたがって大学英語教育を推進して行くべきであろう。

上記のように大学で取り扱うべき英語教育の内容に加えて、学修者本位の教育を実現するためには学生の学ぶ意欲を喚起するような英語教育が必要になる。学生を取り巻く英語教育の状況がどんなに大きく変化しようと、学生自身がやろうとする気持ちを持たない限り英語教育の成果を得ることは不可能である。学生は英語に対するどのような学習動機を持って入学し、本学の英語教育を受けて、どのような動機づけを持つようになったのであろうか。学習動機無くし

て学力の向上はあり得ない。同様に英語に対する動機無くして英語の上達はあり得ない。

本研究の目的は、本学の大学1年次生の英語学習の動機を調査することにある。本学の看護学科の学生と国際教養学科の学生の英語学習動機を定量的・定性的に調査する。また、小学校から大学1年までの英語学習動機の変化を明らかにする。本学に入学して1年間英語教育を受けた大学生の英語学習動機を明らかにすることは、本学の英語教育を考える上で極めて重要な意義を有する。また、このような動機の解明は、大学の英語教育の本来の姿を考えるばかりでなく、初等教育及び中等教育の外国語教育のあり方及びその接続を考える良い機会になる。

1.3 英語学習動機に関する研究

英語学習動機に関して今までどのような研究があったのであろうか。廣森(2011)は、英語学習の動機づけ研究を「動機(motive)」に関する研究、「動機づけ(motivation)」に関する研究、「動機づける(motivate/motivating)」ことに関する研究の3種類に分け、教育実践的示唆について論じている。動機に関する研究では、従来の社会心理学的アプローチ、教育心理学的アプローチ、そして、新しい視点として、他者とのコミュニケーション意識(willingness to communicate)、理想自己(ideal L2 self)を取り上げている。動機づけに関する研究では、動機づけを結果として捉えるのではなく、プロセス志向的(process oriented)に捉える方法が定着しつつあるとしている。動機づけのプロセスに影響を与える要因として、言語学習不安、自己効力感、学習ストラテジー、学習成果を取り上げている。3つ目の動機づけるに関する研究とは、学習者をどのように動機づけたら良いかという、より実践的な側面を持った研究である。具体的には、自己決定理論、動機づけストラテジー研究がある。

2 研究の目的

本研究は、上記の分類にしたがえば、動機づ

けに関する研究である。学習者がどのような英語学習動機を持っているかを明らかにする研究である。特に、今までの英語教育を受けてきた学生が1年間の本学の共通英語を学んだ結果どのような英語学習動機を持つようになったのかを明らかにする。また、今までの英語学習動機を振り返るという意味で、動機づける研究にも関係している。本研究には、以下3つの研究課題がある。

研究課題

1. 本学の学生は1年次の共通英語の授業を受けた後にどのような英語学習動機を持っているのか。
2. 本学の1年次生は英語の授業及び英語教育に対してどのような要望を持っているのか。
3. 本学の1年次生は英語を学び始めてから大学1年次までにどのような英語学習動機を持って英語を学んできたのか。

3 研究方法

3.1 参加者

本調査の参加者は、国際教養学科の1年次生78名と看護学科の1年次生87名の合計165名である。2019年1月、それぞれの授業の最終日に授業担当者が質問紙(資料1)を持参し、授業の最後の10分間を使って調査を実施した。学生は1年間の英語学習を振り返り、どのような英語学習動機を持っているかについて質問紙に記入した。

3.2 データ収集と分析方法

3部構成になっている質問紙(資料1)を使った。第1部は、Taguchi, T., Magid, M., & Papi, M. (2010)を参考にして、52項目の質問項目を選び作成した。項目内容は①英語学習の目的・努力、②理想自己、③義務自己、④文化に対する関心、⑤道具的回避、⑥道具的接近、⑦L2コミュニティへの態度、⑧統合性、⑨自信・不安、⑩家族社会的要因、⑪英語学習に対する態度、⑫コミュニケーションへの意図、⑬

自己効力感である。質問の回答は Lickert scale 4件法の選択式で「全くそう思わない」、「そう思わない」、「そう思う」、「全くそう思う」から選ぶものであった。第2部では学生の英語教育に対する要望を自由記述の形式で尋ね、カテゴリ分析を行った。第3部は、小学校から大学1年までの英語学習動機の変化に関する質問である。

3.2.1 研究課題1分析方法

最初に因子分析を用いて分析した。その後、因子得点を出し、国際教養学科群と看護学科群との平均値の比較を行った。分析に当たっては52項目の回答に欠損のあるものは除いた。その後、尺度項目ごとに記述統計量を算出し、天井効果・床効果を示した項目を除外、探索的因子分析（一般化した最小二乗法、直接オブリンミン回転）を行った。

学科間の比較では、看護学科群と国際教養学科群の2群間で平均値を比較した。各群の尺度得点の平均値を算出し、Leveneの等分散の検定において、等分散であるものについては t 検定を、等分散であるとはいえない場合はWelchの検定を採用した。

3.3.2 研究課題2分析方法

次に、英語の授業および英語教育に対する要望について、「本学の英語教育に関してどのようなことをしてほしいと考えていますか。なるべく具体的に書いて下さい」という問いに対し、自由記述形式で回答を求めた。回答のあった看護学科群31名と国際教養学科群53名のコメントを学科ごとにコードの類似性によりカテゴリーを抽出・分類し、考察した。

3.3.3 研究課題3分析方法

研究課題3では、学生の英語学習動機の変化を測定するために、Visual Analogue Scale (VAS) 法を参考に、独自の方法を考案し調査に用いることとした。医療現場において痛み測定尺度として汎用されている疼痛や自己評価

など主観的要素の定量的評価は困難とされている中、「度合いスケール」のうちVASは広く用いられており、特に医療の分野では、従来から痛みの評価 (pain scale) として様々な様式のVASが用いられてきた (Maruo et al. 2013)。また学生の講義・実習の自己評価の方法にも取り入れられている (武井他 2007、成橋他 2003)。本研究では、資料1の質問紙 Part 3 に示すように、縦軸にVAS法を取り入れた学習動機、横軸を時間とした2元グラフを作成し、参加者には学習動機が経時的にどう変化したか、自由に線で引くことで回答させた。さらに、学習動機が最高 (ピーク) となった時 (質問A)、最低になった時 (質問B) について、それぞれ、その理由を質問紙の「英語学習動機の変化」の理由に示したリストより回答させ、複数回答を可とした。

解析は以下の方法を採用した。回答用紙をスキャンし電子jpgファイルとした。学生が引いた曲線の曲線下面積 (積分値) (図1の斜線部分) を面積計算ソフトにより算出し、積分値を、学習意欲の程度と規定し、全体 (図1の薄着色部分) に対する割合、(積分割合) を求めた。この積分割合の変化を学習動機・意欲の変化と捉えることとした。大学入学前後での比較として、Xの解析として [小学校から高校] 対 [大学入学から現在まで] の比、あるいは、Yの解析として [高校3年間] 対 [大学入学から現在

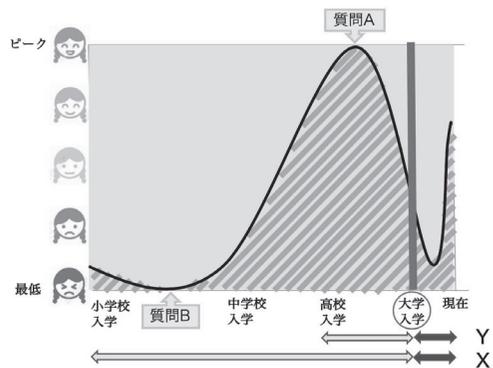


図1：学習動機変化の測定方法

まで] 比で解析を行った。なお、両方の学科では習熟度別クラスによる授業を実施しているため、このパートでは上位の Advanced Class (Aクラス) と、下位の Basic Class (Bクラス) に分けて解析した。

4 結果と考察

4.1 研究課題1

調査票は165部回収し、因子分析の項目に欠損値のあった9件のデータを削除し、156データを分析対象とした。

天井効果については平均値と標準偏差の和が項目の最大得点4点を超えるものを除外し、床効果については平均値と標準偏差の差が項目の最少得点1点を下回るものを除外する基準で、質問項目5、7、8、17、18、21、22、38、43、44、46の11項目は天井効果を示したため、また質問項目48は床効果を示したため削除した。

残った40項目を用いて、一般化した最小二乗法、直接オプティミズ回転を使用して因子分析を行った。因子負荷量が.40未満の項目を除き、また、信頼性分析により項目を削除した時の Cronbach の α が.7より高くなるものを除いて因子分析を繰り返した結果、33項目に5因子が抽出された。KMO 測度は.923、バートレットの球面性測定は $p < .01$ で、Cronbach の α は全体で0.821であった。回転前の5因子によって全分散を説明する割合は、64.54%であった。因子分析結果を表1に示す。

第1因子は英語圏からの人と会うのが好きである、〈将来英語圏に住みたい〉、〈英語圏の音楽が好きだ〉、など11項目から成り、「英語・文化への興味関心」と命名した。この因子が全体の40%を占めていることから、全体的に英語・文化に関することに関心が高いことを示している。第2因子の〈親が英語の勉強を勧めている〉は親の影響ではあるが、〈親の期待に応えるために英語を学んでいる〉、〈「私の周りの人々が期待するので、英語の勉強をする〉、〈親は私が教養ある人になるためには英語を学ばなければならないと考えている〉は義務自己 (ought-to

L2 self) の項目である。また、〈英語力がないと学力が低いと思われるので、英語の勉強は大切だ〉、〈大学で悪い点数を取りたくない〉、〈英語の勉強をしなければならぬ〉は道具的回避 (instrumentality prevention) の項目である。そこで、第2因子は、「義務自己と道具的回避」と名付けた。義務自己とは、親や周囲の期待に添いたいという心情を示している。また、第3因子は5項目から成り、〈英語の授業を楽しんで受講している〉、〈英語の授業の雰囲気が好きである〉、などの項目であった。これは負の因子負荷量を示したので「英語授業に対する消極的態度」と名付けた。第4因子は〈予期せぬ出来事に遭遇しても私は効率よく対処できる自信がある〉、〈自分自身の英語力には自信がある〉など8項目からなり、「理想自己と自己効力感」と名付けた。第5因子は〈英語で道を聞かれると緊張する〉など3項目から成り、「英語を話すことの緊張」と命名した。

5つの因子から全体として解釈できることは、英語・文化への興味関心を持ち、英語に対してある程度自信を持ち、英語を使う自分の将来を理想に持ちながらも、周囲の期待に沿いたい、悪い点数を取りたくないという義務自己と道具的回避や英語を話すことに対する不安を持ち、更に、英語の授業に関しては楽しんでいる様子はない消極的態度が混在している複雑な状況である。その中で、英語・文化への興味関心が高いことが特徴的である。

次に、学科間の比較を通して考えてみよう。看護学科群は74名、国際教養学科群が82名であった。第3因子のみ尺度得点を逆転させて各群の尺度得点の平均を算出し、 t 検定(または Welch の検定)を行ったところ、第1因子「英語・文化への興味関心」、第2因子「義務自己と道具的回避」、第4因子「理想自己と自己効力感」は国際教養学科群が有意に高く、第3因子「英語授業に対する消極的態度」は看護学科群が有意に高かった(表2)。第5因子「英語を話すことの緊張」では群間の平均に有意差はなかった。つまり、学科群間の比較を通して、

表1 因子分析結果

因子名	番号	項目内容	I	II	III	IV	V
I. 英語・文化への興味関心	33	英語圏からの人と会うのが好きである	0.83	-0.12	-0.13	0.06	-0.06
	32	英語運用能力試験(英検…)で悪い点数を取りたくないの で、英語の勉強をしている	0.76	0.03	-0.02	0.04	-0.14
	20	英語圏に住んでいる人々が好きである	0.74	0.13	0.05	0.00	0.02
	47	将来英語圏に住みたい	0.72	-0.11	-0.12	0.04	-0.05
	25	英語のネイティブ・スピーカーのコミュニティーに入りたいと思 う	0.68	0.02	-0.27	0.03	-0.06
	31	私は将来仕事や留学で海外にずっと住みたいので、英語 の勉強は大切だ	0.60	0.03	-0.09	0.14	0.02
	4	英語圏の音楽が好きだ	0.56	0.07	-0.06	-0.06	-0.03
	35	私の周りのほとんどの人が外国語を学ぶことは良いこと であると考えている	0.52	0.08	0.05	0.23	0.12
	30	英語の雑誌や本が好きだ	0.52	0.05	-0.10	0.20	-0.14
	12	英語のネイティブ・スピーカーに自分から話しかけたいと思 う	0.43	0.15	-0.05	0.32	-0.28
II. 義務自己と 道具的接近	19	将来のキャリアで失敗しないためにも英語を勉強しなけれ ばならない	0.41	0.39	-0.16	-0.08	0.15
	16	親の期待に応えるために英語を学んでいる	-0.21	0.88	-0.19	0.09	-0.02
	29	私の周りの人々が期待するので、英語の勉強をする	0.08	0.67	-0.13	0.09	-0.10
	42	親は私が教養ある人になるためには英語を学ばなければ ならないと考えている	0.08	0.65	0.12	0.11	0.04
	45	英語力がないと学力が低いと思われるので、英語の 勉強は大切だ	0.14	0.56	0.12	-0.11	0.03
	9	親が英語の勉強を勧めている	-0.06	0.46	-0.20	0.14	-0.10
III. 英語授業 に対する消極 的態度	6	大学で悪い点数を取りたくないの、英語の勉強をしなけ ればならない	0.07	0.44	0.06	-0.12	0.26
	1	今大学で英語の授業を楽しんで受講している	0.08	-0.09	-0.87	0.03	0.04
	36	いつも英語の授業を楽しみにしている	0.10	0.10	-0.76	0.08	0.00
	10	英語の授業の雰囲気が好きである	0.15	0.12	-0.76	-0.09	-0.05
	49	英語を学ぶことを楽しんでいる	0.30	0.03	-0.43	0.30	-0.10
	14	今一生懸命英語を学んでいる	0.27	0.12	-0.41	0.20	0.09
IV. 理想自己と 自己効力感	39	予期せぬ出来事に遭遇しても私は効率よく対処できる自信 がある	0.09	-0.07	0.12	0.83	-0.05
	26	目的を見失わず、ゴールを達成することは私にとって難し いことではない	-0.18	0.07	-0.10	0.70	0.04
	52	私は問題に直面しても、いつもいくつかの解決策を見つけ ることができる	0.17	0.08	0.11	0.69	-0.02
	28	英語が話せる自分を想像できる	0.29	-0.02	-0.09	0.66	-0.03
	11	自分自身の英語力には自信がある	0.07	0.06	-0.10	0.57	-0.25
	13	私は一生懸命頑張れば、困難な問題でもいつも解決する ことができる	0.12	0.01	-0.10	0.46	0.00
V. 英語を話 すことの緊張	2	外国に住み、英語を話している自分を想像できる	0.29	0.01	-0.25	0.46	-0.04
	41	将来、仕事で英語を使う自分自身を想像できる	0.19	0.05	-0.39	0.45	-0.04
	37	英語のネイティブスピーカーと話すと緊張する	-0.02	0.03	0.10	0.14	0.80
	50	英語で道を聞かれると緊張する	-0.08	-0.09	-0.18	-0.05	0.73
	24	教室で英語を話すと緊張する	0.02	0.07	0.02	-0.07	0.69
		回転前の因子寄与率	40.02%	9.73%	5.45%	5.03%	4.31%

国際教養学科の学生は「英語・文化への興味関心」、「義務自己と道具的回避」、「理想自己と自己効力感」が看護学科の学生より高く、「英語に対する消極的態度」は看護学科の学生が高く、「英語を話す緊張」に関しては両者とも同じように持っているということがわかった。

確かに、英語圏に留学することを決めて国際教養学科に入り、実際に1年間英語を中心に集中的に学ぶ学生は、週に2コマの英語の授業しかない看護学科の学生より「英語・文化への興味関心」、「義務自己と道具的回避」、「理想自己と自己効力感」に関して高い意識を持っている

表2 学科間比較 (t-test)

因子	看護学科 n=74		国際教養学科 n=82		t値	p値
	平均	SD	平均	SD		
I 英語・文化への興味関心	2.42	0.65	3.23	0.50	-8.78	<0.001
II 義務自己と道具的接近	2.42	0.54	2.65	0.68	-2.38 *	0.02
III 英語授業に対する消極的態度	2.72	0.61	1.87	0.60	-8.79	<0.001
IV 理想自己と自己効力感	2.01	0.55	2.72	0.60	-7.67	<0.001
V 英語を話すことの緊張	2.95	0.69	2.74	0.79	1.76	0.08

* Welch-test

のは予想通りのことである。また、国際教養学科の学生が看護学科の学生より「英語の授業に対する消極的態度」が低いのも予想通りである。興味深いのは、英語を話す緊張に関しては国際教養学科の学生も看護学科の学生についても差がなかったことである。

4.2 研究課題2

次に、英語の授業および英語教育に対する要望について「本学の英語教育に関してどのようなことをして欲しいと考えていますか。なるべく具体的に書いて下さい」という問いに対し、自由記述形式で回答を求めた。看護学科群においては78人中31人(54%)が、また国際教養学科群においては87人中53人(61%)が回答し、記入のあった回答のみを対象に、学科ごとにコードの類似性によりカテゴリーに分類した。その結果、看護学科群によるコメントからは4つのカテゴリーが、また国際教養学科群からは1つのカテゴリーが抽出された。

4.2.1 看護学科学生からの要望

看護学科群からの要望は4つのカテゴリー(「英語学習の意義と目的の明確化」「コミュニケーションのための英語学習」「英語学習継続のための助言」「大学での英語学習のあり方」)に分かれた。

まず、5%が大学で英語学習を継続すること

の意義と目的を明確に提示してほしいと要望を述べた。看護学科の学生にとっては、大学入学後の専門分野の勉強に加え、さらに英語学習を継続することは明確な目的がなければ困難だといえよう。

次に、学生が考える大学英語の理想の形とは、自分たちに適したレベルで、その場で「聞いて理解する→話す」というコミュニケーションのための英語学習で、それを授業で実現してほしいという意見が、要望を述べた調査協力者の65%あった。看護学科生であっても英語学習を継続している以上、英語話者とのリアルな会話練習を望んでいる。また、15%の学生は今までの中学校・高校からの文法やリーディングを中心とした、いわゆる受験英語とは異なる「使うための英語」の機会を大学英語に求めている。

3つ目に、授業外での効果的な英語学習方法についてのアドバイスを受講生は求めているということである。英語学習を自主的に継続したいと考える受講生は、仮に会話相手がいないとしても、映画や海外ドラマなどを用いた方法で英語を楽しみながら理解したいと願っている。英語学習者として経験を積む教員からの効果的な学習方法の提示は、中学校・高校までの英語学習方法とは異なる、大学生としての英語学習意欲を刺激する動機付けになるとと思われる。

4つ目に、教員は英語を専門的に学ぶ学生ではないことを理解し、予習や復習を過度に求め

ず、授業時における英語文化との遭遇を学生の英語学習への動機（刺激）として取り入れる工夫をしてほしいという意見もあった。大学では専門分野における学業が優先されるべきであるとの回答が15%あった。

非英語専攻学科の学生にとっての共通英語としての授業の意義は、教員と学生、ひいては大学全体の共通意識として共有することが英語学習への動機付けとして必要であると考えられる。

4.2.2 国際教養学科生からの要望

国際教養学科生からの要望は1つのカテゴリ（「実用的・実践的な英語使用の機会」）に集中した。まず、第一に特徴として挙げられるのは、授業内でより実用的・実践的に英語を使いたい、もっと英語を（授業で）話したい、という意見が最も多かった点が特徴的である。具体的には、「ディスカッション」や「クラスで英語を使ってなにか作業をする機会」、「グローバル企業訪問やプロジェクト」を増やしてほしいという意見があり、要望を述べた調査協力者の約36%を占めていた。その中には、やや不満を述べ、トレーニング以外の内容を求めた要望も含まれていた。

本学科は外国語学部英語科のように英語に特化して言語を学ぶ学科ではないが、1年後に全員がカリキュラムの一環としての英語圏大学への留学を控えており、英語関連の授業は、主に留学準備のための TOEFL や IELTS のトレーニングに特化した内容が大半を占める。英語を学習する時間が看護学科群の受講生よりも多い分、また近い将来英語圏大学への留学を学習の目的及び短期的な目標としている意識もあり、英語学習へのモチベーションや英語の習得度は共通群と比べてそもそも高いと推察される。また、授業での英語学習の目的と TOEFL 受験などの（近い）目標が明確になっており、それに向けた戦略も含めた学習を行なっている分、看護学科群の回答で認められていたような「効果的な英語学習方法」に関してアドバイスを求めるような要望はなかった。身につけ

た英語力はまずは上記のような英語テストでどれだけスコアアップできるかによって達成度が測られることになる。しかし、英語を「ある程度習得した」と受講者自身が実感したのちには、学んだ語彙や言い回しを使って意見交換を活発に行ったり、その知識を元手に何かタスクに取り組み達成感や自己効力感を得たいと感じるようになることは十分想定され、ある意味望ましい学習の産物であるともいえる。

次に、「より実用的・実践的な英語使用の機会」に対する要望は授業内での英語使用を超えて、実社会での使用にも要望が及んだ。留学生との交流の機会を作ってほしいとの要望が「要望」の約15%、ネイティブスピーカーともっと会話したいとの要望が約11%あったことから、自身の英語をよりオーセンティックな環境で使いたいという要望が見て取れた。これも第一の特徴と同じく、身に付いた（であろう）英語力をより実践で試してみたい、より実践の場でスキルアップを目指したいというさらなる学びへのモチベーションと解釈することができる。

まとめると、国際教養学科群の学生は、【より多くの時間を英語学習に費やしている分、身についた（もしくは、ついているかどうかを試すためにも）】英語力をより実践の場で、つまりコミュニケーションの手段として英語を活かす作業に取り組みたい要望が強く表れているといえる。たとえ小規模であっても教室内外で実施できるプロジェクトや実社会との関わりの中で英語を使ってコミュニケーションが行える機会を学習の比較的早い時期から設けることで力試しできる（＝自信をつけさらなる動機付けにつなげる）工夫をカリキュラムに盛り込むことは、今後検討の価値があるといえるのではないだろうか。

4.2.3 まとめ

看護学科と国際教養学科の2学科において、英語の授業および英語教育に対する要望を比較した。看護学科群では、特に、自分たちのレベルに適した「使える英語」へのモチベーション

が高く、同時に英語学習方法に関するアドバイスも含め、英語学習によりモチベーションを持って取り組めるための環境づくりに関する要望が観察された。国際教養学科群では、留学に係るテスト対策としての英語スキルアップに留まらず、特に、身に付けた英語のスキルをより実践的な環境で使うこと、もしくは使ってみて実践力を試せる機会を望む回答が多くあった。大学として、それぞれのニーズに応じより満足度を高めつつ英語スキルを身につけることができる教授法や言語材料を取り入れるための工夫が求められている。

なお、看護学科群において78人中47人(46%)が、また国際教養学科群においては87人中34人(39%)が無記入もしくは「特になし」と回答した。これは何を意味するのか。学生が英語学習に対して「要望がない」「満足している」ということなのか、考えたことのないことに対して「答えにくい」「回答が困難であった」さらには「無関心」ということなのか。本質問紙による調査での「回答なし」もしくは「特になし」の真意を探るためには、記述のあった調査協力者との他の回答を比較したりさらなる質的調査を実施する必要がある、今後の課題であることを追記したい。

4.3 研究課題3

英語学習意欲の変化について、積分割合解析により学習意欲が向上した学生の割合を算出した(図2)。国際教養学科群ではいずれのクラスにおいても、大学進学で学習意欲が向上した学生がXの解析で90%以上、Yの解析で80%程度と、かなり多く、看護学科においてもXの解析で55~70%、Yの解析でも50%弱と高い数値を示した。

学科による差が見られたが、これは進学動機にも関連しているのではないかと考えられる。

全体に、XよりYでの解析の方が低値を示しているが、これは、すでに、小学校・中学校と英語学習の機会が増え、高校までに学習動機がある程度向上していたため、また、高校での英

語の学習が中学より語彙や文法事項が増え難しくなったためであると考えられる。この結果より、いずれの学科においても、大学入学により、英語に対する学習動機がさらに向上していることが明らかとなった。

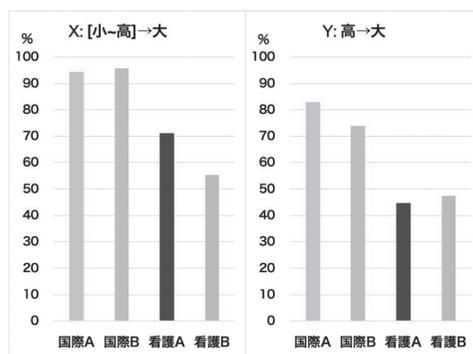


図2：学習意欲が向上した学生の割合

さらに、英語学習動機の変化がどの程度であったかについて、大学入学後における積分割合の倍率を比較した(図3)。この解析では、大学入学後、意欲向上では1以上、意欲低下では1未満の数値となる。Yの解析において、看護Bでは1をやや下回っているが、これ以外は1.5~2倍と1よりも高値を示し、全体としては、大学入学で意欲が向上したと見なすことができた。

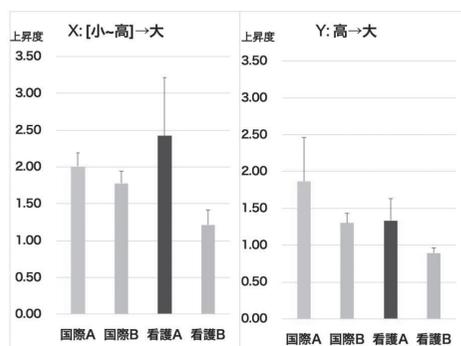


図3：学習意欲の変化度
データは平均±SEM

Yの解析では看護Aが他よりもかなり高い値を示したが、これは、標準誤差 (SEM) も大きく、図4に示すような、大学入学前においてほぼ0の学習意欲を示す回答があり、この場合

は倍率が著しく大きくなったため、このような結果となったと考えられた。

次に、英語に対する学習意欲がピークとなったきっかけや理由に関する質問の解析について

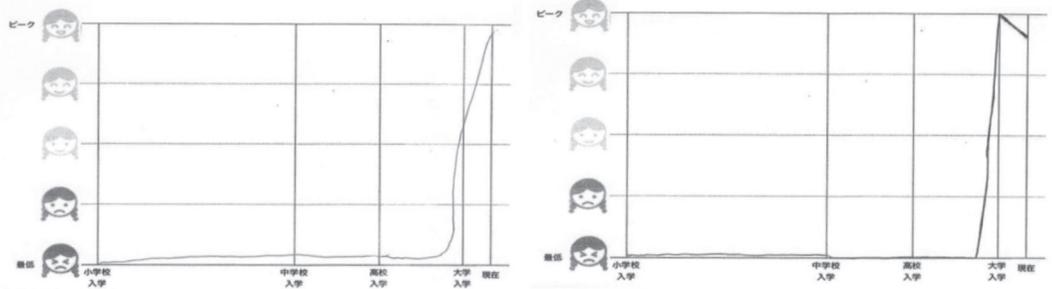


図4：学習意欲の変化が極端な例

看護学科Aにおけるが悪臭意欲の変化度が著しく大きい2例。いずれも、小学校入学～高校入学、あるいは高校在学中の意欲がほぼ0であり、その後が大きく上昇するため、変化度が著しく大きな値となる。

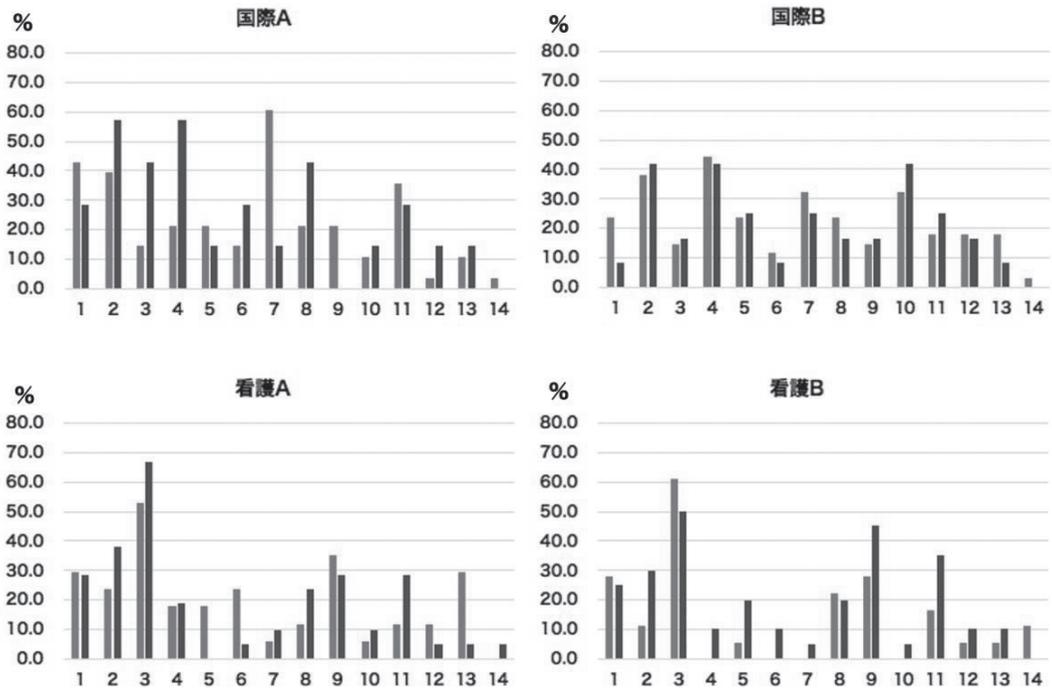


図5：英語に対する学習意欲がピークとなったきっかけや理由

資料1 (質問紙) の Part 3 の学習意欲がピークとなったきっかけや理由についての複数回答による集計。各番号は質問項目の番号で、左側カラムは図3の解析により大学入学により意欲が向上した (1より大きい値を示した) 学生群、右側カラムは意欲が低下した (1より小さい値を示した) 学生群。

図5に示した。回答は複数回答可であり、各群での回答率を示している。全体として、国際教養学科群が、また、両学科ともAクラスの方がBクラスよりも複数回答数が多かった。大学での英語の学習量が多い学科の学生、英語の成績の良い学生の方が英語学習に対してポジティブ思考であることを示していると考えられる。回答内容は、国際教養学科群では、受験関係、趣味など、理由は多岐にわたっているが、看護学科群では「1 学校で英語科目の授業が始まったから」「3 受験で必要だったから」などの外部要因によるものが主なものとなっていることが明らかとなった。

英語に対する学習意欲が最低となったきっかけや理由に関する質問の解析について図6に示した。回答は複数回答可であり各群での回答率

を示している。全体として、回答数が低く、ネガティブ思考の意見が少ないととらえることができる。目立つ部分として、国際Aでは大学入学で学習意欲が向上した学生において、「2 学校で英語を勉強して楽しくなくなり、苦手だとわかったから」「6 英語のテストの点数が悪かったから」「12 英語の勉強の仕方がわからなくなったから」の回答が多かった。このことは、英語を専門として、より真剣に学習に取り組んでいる学生においては、英語学習のつまずきが意欲の低下につながっているのではないかと考えられた。このつまずきは恐らくTOEFL iBTでの結果の影響であると考えられる。留学を義務付けられた国際教養学科では、TOEFL iBTの受験を受験しなければならず、最初はなかなか一定のレベルに達することが難

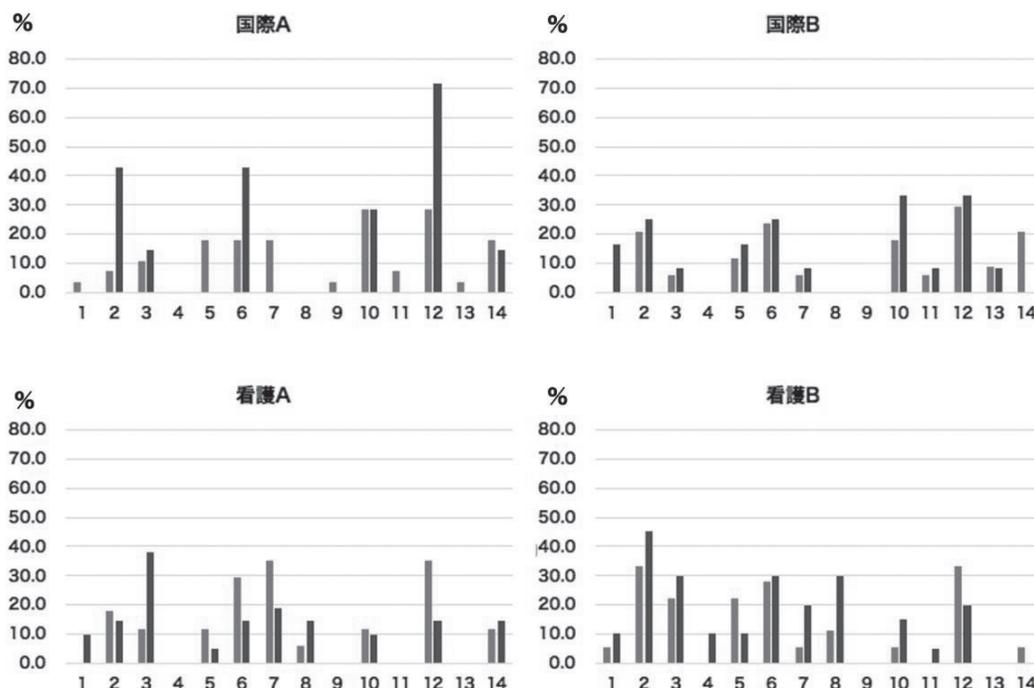


図6：英語に対する学習意欲が最低となったきっかけや理由

資料1（質問紙）のPart3の学習意欲が最低となったきっかけや理由についての複数回答による集計。各番号は質問項目の番号で、左側カラムは図3の解析により大学入学により意欲が向上した（1より大きい値を示した）学生群、右側カラムは意欲が低下した（1より小さい値を示した）学生群。

しいためであると考えられる。

5 結論

初等中等教育と大学を取り巻く教育環境が大きく変化する中で、今後大学教育において学修者本位の教育を実現するために、学生の学ぶ意欲を喚起するような英語教育が必要になる。本研究は本学の国際教養学科と看護学科の1年次生対象に入学前そして入学後の英語学習動機について明らかにしたものである。以下、本研究で明らかになった学生の英語学習動機を学生の経年変化に沿ってまとめる。

同じ学年であることから、両学科の学生ともほぼ同じ時期に英語の学習を始めたと思われる。恐らく小学校入学前から英語の学習を始めていた学生もいたであろう。この研究ではそのことに関しては明確にしていけない。しかし、学生は旧学習指導要領の下で英語を学んできたことは事実である。小学校では外国語活動として週に1回程度英語の活動があったであろう。その中で、国際教養学科の学生は英語を受験以外の様々な目的を持って学習してきたのに対して看護学科の学生は様々な目的よりも、主に受験を中心とした外的要因を中心に学習してきた。両学科の学生は共に小学校から高校までの学習意欲の方が高校から大学までの学習意欲よりも高い状態で学習してきた。大学入学後は、国際教養学科の学生も看護学科の学生も学習意欲が向上している。特に看護学科の学生が高校時代より英語の科目数が少ないながらも学習意欲が高まっている点は興味深い点である。

大学で1年間英語を学んだ両学科の学生の中に学習動機として5つの因子があり、それぞれ第1因子「英語・文化への興味関心」、第2因子「義務自己と道具的回避」、第3因子「英語授業に対する消極的態度」、第4因子「理想自己と自己効力感」、第5因子「英語を話すことの緊張」と名付けた。両学科で比べると、国際教養学科の学生は「英語・文化への興味関心」、「義務自己と道具的回避」、「理想自己と自己効力感」が看護学科の学生より高く、「英語に対

する消極的態度」は看護学科の学生が高く、「英語を話す緊張」に関しては両者とも同じように持っているということがわかった。その中で、英語・文化に対する興味関心が特に高いことがわかった。学生の要望に関して、全体として半分近くの学生が無回答であったが、両者とも実際に英語でコミュニケーションできる機会が欲しいと考えている。

本研究の教育的示唆として言えることは、以下の3点である。1つは、大学に入学して学生の英語学習意欲は弱まっているのではなく、むしろ強まっている。そのような学生の興味・関心、そして意欲を更に喚起するために英語でコミュニケーションできる機会を増やすことが大切である。次に、国際教養学科と看護学科の学生に英語学習動機に差があるが、看護学科の学生も英語や文化に興味を持ち、義務自己と道具的回避、理想自己や自己効力感を持っていることは事実である。たとえ限られた時間であっても、それらを少しでも喚起する機会があればもう少し多くの英語の学習動機を持った学生が増えるのではないだろうか。最後に、両学科の学生は共に英語を話す不安を持っている。不安には英語学習を促進させる働きもあることから、学生の不安を話す自信へと向かわせるような授業の工夫が必要である。

最後に本研究の限界と今後の研究の方向性について述べる。共通英語を受けている学科の学生として今回は看護学科の学生を選んだが、学部学科により英語学習の差があることは事実である。その他の学科についても調査が必要である。また、今後大学全体としてどのような英語学習動機を持っているのかについても分析を進め、まとめたい。

参考文献

- 阿部公彦 (2018). 『史上最悪の英語政策うそだらけの「4技能」看板』ひつじ書房.
- 合田哲夫 (2017). 講演「学習指導要領と言語教育」明海大学複言語、複文化センター資料.
- 南風原朝和, 宮本久也, 羽藤由美, 阿部公彦, 荒井

- 克弘 (2018). 『検証 迷走する英語入試スピーキング導入と民間委託』 岩波書店.
- 廣森友人 (2011). 「動機づけ研究の観点から見た効果的な英語指導法」 小嶋, 尾関, 廣森編『大学英語教育学体系第6巻成長する英語学習者』大修館書店.
- 飯田 毅, 成橋和正, 橋本秀実, 今井由美子, 佐伯林規江, 高橋 玲, 若本夏美, 松中みどり (2018). 「本学の教育理念及び Vision150を活かした共通英語教育開発のための基礎研究—1年目のまとめと考察」 同志社女子大学総合文化研究所紀要35, 45-81.
- 飯田 毅 (2019). 「2017・2018年改訂学習指導要領の特徴—その背景と英語教育の目的—」 日本教育学会近畿地区研究集会発表資料, 京都大学, 2019年3月9日.
- 飯田 毅, 佐伯林規江, 今井由美子, 橋本秀実, 成橋和正 (2019). 「英語を専門としない大学生の英語学習に対する動機—英語専門学部の学生との比較を通して—」 JACET 第58回国際大会, 名古屋工業大学.
- 荏谷剛彦 (2017). 『オックスフォードからの警鐘』 中公新書ラクレ.
- 国立教育政策研究所 (2015). 「学習指導要領データベース」
<http://www.nier.go.jp/guideline/index.htm> (2019/03/04閲覧)
- 久保田竜子 (2015a). 『グローバル化社会と言語教育—クリティカルな視点から—』 くろしお出版.
- 久保田竜子 (2015b). 『英語教育と文化・人種・ジェンダー』 くろしお出版.
- 久保田竜子 (2018). 『英語教育幻想』 筑摩書房.
- 文部科学省 (2016). 英語教育の在り方に関する有識者会議 (第9回) 議事録平成26年9月26日.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/index.htm (2018/09/09閲覧)
- 文部科学省初等中等教育局国際教育課 (2017). 「平成28年度英語教育実施状況調査の結果について」
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1384230.htm (2018/02/24閲覧)
- 文部科学省 (2018a). 「小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説外国語活動・外国語編」 開隆堂出版.
- 文部科学省 (2018b). 「中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説外国語活動・外国語編」 開隆堂出版.
- 文部科学省 (2019). 「中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説外国語活動・外国語編」 開隆堂出版.
- 文部科学省 (2018). 中央教育審議会「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン (答申)」 本文
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/12/20/1411360_1_1_1.pdf (2020/02/26閲覧)
- 文部科学省 (2018). 「2040年度に向けた高等教育のグランドデザイン (答申)」 (中教審第211号)
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/11/1411368.htm (2020/02/26閲覧)
- 成橋和正, 野村政明, 亀井浩行, 小野俊介, 松下良, 清水 栄, 横川弘一, 山田清文, 鈴木永雄, 宮本謙一, 木村和子 (2003). 大学院修士課程臨床薬学講義ならびに実務実習の Visual Analog Scale 法による客観的評価. 薬学雑誌 (日本薬学会), 123(11), 973-980.
- 日本学術会議 (2010). 「大学教育の分野別質保証の在り方について」
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/division-8.html> (2020/02/26閲覧)
- 日本学術会議 (2012). 「報告 大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準言語・文学分野」
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-h166-3.pdf> (2018/02/24閲覧)
- 日本学術会議言語・文化委員会 文化の邂逅と言語分科会 (2016). 「提言ことばに対する能動的態度を育てる取り組み 初等中等教育における英語教育の発展のために」
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t236.pdf> (2018/02/24閲覧)
- 日本経済団体連合会 (2000年) 意見書「グローバル化時代の人材育成について」
<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2000/013/index.html> (2018/09/07閲覧)

- 野村昌司 (2016). 「グローバル化に対応した英語教育とは」(pp.1-13). 齊藤兆史, 鳥飼玖美子, 大津由紀男, 江利川春雄, 野村昌司 (2016)『「グローバル人材育成」の英語教育を問う』ひつじ書房.
- 岡倉由三郎 (1911). 『英語教育』博文館
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/812330>
 (2018/02/24閲覧)
- 大津由紀男, 江利川春雄, 齊藤兆史, 鳥飼玖美子 (2013). 『英語教育、迫り来る破綻』ひつじ書房.
- 齊藤兆史, 鳥飼玖美子, 大津由紀男, 江利川春雄, 野村昌司 (2016). 『「グローバル人材育成」の英語教育を問う』ひつじ書房.
- Taguchi, T., Magid, M., & Papi, M. (2010). The L2 Motivational Self System among Japanese, Chinese, and Iranian Learners of English: A comparative Study. In Dornyei, Z. & Ushioda, E. (Eds.), *Motivation, Language Identity and the L2 Self*. (pp.66-97). Bristol: Multilingual Matters.
- 武井圭一, 杉本 論, 猪股高志, 大嶽昇弘, 安藤正志, 解良武士, 齊藤信夫, 今泉 寛 (2007). 学内検査実習前後による検査能力自己達成度および実習満足度の検討. 22(1), 83-87
- Tomoyuki Maruo, Aya Nakae, Lynn Maeda, Kayoko Takahashi — Narita, Shayne Morris, Masaru Yokoei, Taiga, Matsuzaki, Masahiko Shibata, & Youichi Saitohi. (2013). Translation and reliability and validity of a Japanese version of the revised Short — Form McGill Pain Questionnaire (SF — MPQ — 2). *Pain Research*, 28, 43-53.
- 寺沢拓敬 (2014). 『「なんで英語やるの？」の戦後史 — 国民教育としての英語、その伝統と成立過程』研究社.
- 寺沢拓敬 (2015). 『日本と英語』の社会学』研究社.
- 鳥飼玖美子, 大津由紀男, 江利川春雄, 齊藤兆史 (2017). 『英語だけの外国語教育は失敗する』ひつじ書房.

謝辞

本研究はJACET 第58回国際大会(名古屋工業大学)で口頭発表した草稿に加筆したものである。また、この研究は本学の2017年-2019年研究プロジェクト「本学の教育理念及びVision 150を活かした共通英語教育開発のための基礎研究」として本学から援助を受けている。

資料1 同志社女子大学 英語学習動機についての調査用紙

同志社女子大学 英語学習動機についての調査用紙

はじめに

この研究は本学の英語教育をより良いものにするために実施されるものです。この質問紙は英語学習動機(モチベーション)に関するものです。現在の大学の生活の中でどのように考えているかという観点から、率直にありのままを答えて下さい。大学の成績とは一切関係がありません。結果に関しては統計処理を行いますので個人名が特定されることはありません。また、このデータは研究目的以外には使用しません。参加は個人の自由意志に任せられます。

研究プロジェクト English 2020

- 飯田 毅 (代表・学芸学部・国際教養学科) 連絡先: tiida@dwc.doshisha.ac.jp
- 佐伯 林規江 (学芸学部・国際教養学科)
- 高橋 玲 (薬学部・医療薬学科)
- 成橋 和正 (薬学部・医療薬学科)
- 橋本 秀実 (看護学部・看護学科)
- 今井 由美子 (表象文化学部・英語英文学科)
- 若本 夏美 (表象文化学部・英語英文学科)

回答方法

回答は全てこの質問紙に記入して下さい。Part 1 から Part 3 までの3種類の質問があります。Part 1 は当てはまる数字に○をつけて下さい。Part 2 は自分が思っていることを自由に記述して下さい。Part 3 は自分自身の考えや経験を簡単に図で表現し、理由を選んで下さい。

注意

- 友達と相談しないで、各自で回答して下さい。
- 回答する項目を飛ばさないように気をつけて下さい。

Part 1

ふだんの英語学習の状況に関して、率直に、ありのままを答えて下さい。当てはまる1から4の数字を一つ選んで、○で囲んで下さい。

		全くそう 思わない	そう 思わない	そう 思う	全くそう 思う
1	今大学で英語の授業を楽しんで受講している。	1	2	3	4
2	外国に住み、英語を話している自分を想像できる。	1	2	3	4
3	友人や先輩が英語の学習は大切だと言っているので、英語を学んでいる。	1	2	3	4
4	英語圏の音楽が好きだ。	1	2	3	4
5	英語の勉強をしておくと、いつか将来の良い仕事に得るために役立つ。	1	2	3	4
6	大学で悪い点数を取りたくないなので、英語の勉強をしなければならない。	1	2	3	4
7	英語圏へ旅行することが好きである。	1	2	3	4

		全くそう 思わない	そう 思わない	そう 思う	全くそう 思う
8	英語圏の人々の文化や芸術をさらに知るために、英語の勉強は大切だ。	1	2	3	4
9	親が英語の勉強を勧めている。	1	2	3	4
10	英語の授業の雰囲気が好きである。	1	2	3	4
11	自分自身の英語力には自信がある。	1	2	3	4
12	英語のネイティブ・スピーカーに自分から話しかけたいと思う。	1	2	3	4
13	私は一生懸命がんばれば、困難な問題でもいつも解決することができる。	1	2	3	4
14	今一生懸命英語を学んでいる。	1	2	3	4
15	外国人の友達や仲間と英語で話す自分を想像できる。	1	2	3	4
16	親の期待に応えるために英語を学んでいる。	1	2	3	4
17	英語圏の映画が好きだ。	1	2	3	4
18	英語の運用能力は就職後の昇進に必要なので、英語の勉強は大切だ。	1	2	3	4
19	将来のキャリアで失敗しないためにも英語を勉強しなければならない。	1	2	3	4
20	英語圏に住んでいる人が好きである。	1	2	3	4
21	英語のネイティブ・スピーカーのように話せるようになりたい。	1	2	3	4
22	私の周りの多くの人が英語の学習は有益であると考えている。	1	2	3	4
23	英語を学ぶことは面白い。	1	2	3	4
24	教室で英語を話すとき緊張する。	1	2	3	4
25	英語のネイティブスピーカーのコミュニティーに入りたいと思う。	1	2	3	4
26	目的を見失わず、ゴールを達成することは私にとって難しいことではない。	1	2	3	4
27	今まで英語学習に努力を費やしてきた。	1	2	3	4
28	英語が話せる自分を想像できる。	1	2	3	4
29	私の周りの人々が期待するので、英語の勉強をする。	1	2	3	4
30	英語の雑誌や本が好きだ。	1	2	3	4
31	私は将来仕事や留学で海外にずっと住みたいので、英語の勉強は大切だ。	1	2	3	4
32	英語運用能力試験(英検、TOEIC、TOEFL、IELTS等)で悪い点数を取りたくないの、英語の勉強をしている。	1	2	3	4
33	英語圏からの人と会うのが好きである。	1	2	3	4
34	英語を話す人が好きである。	1	2	3	4
35	私の周りのほとんどの人が外国語を学ぶことは良いことであると考えている。	1	2	3	4
36	いつも英語の授業を楽しみにしている。	1	2	3	4
37	英語のネイティブスピーカーと話すとき緊張する。	1	2	3	4
38	日常生活でもっと英語を使いたいと思う。	1	2	3	4
39	予期せぬ出来事に遭遇しても、私は効率よく対処できる自信がある。	1	2	3	4
40	目的を持って英語を学んでいる。	1	2	3	4
41	将来、仕事で英語を使う自分自身を想像できる。	1	2	3	4
42	親は私が教養ある人になるためには英語を学ばなければならないと考えている。	1	2	3	4

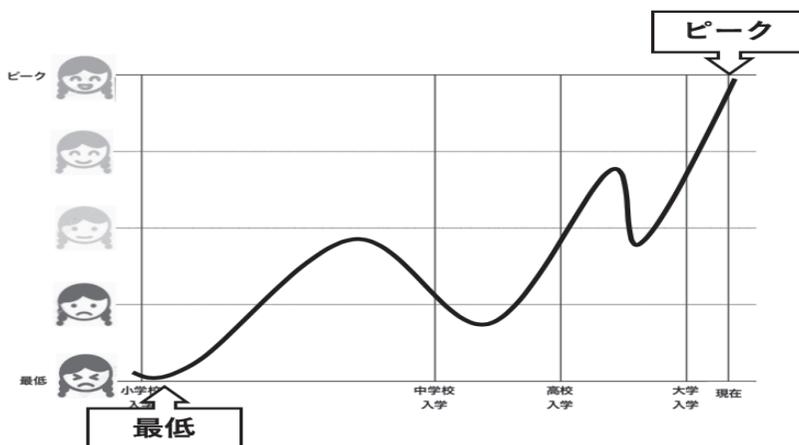
		全くそう 思わない	そう 思わない	そう 思う	全くそう 思う
43	英語圏の文化に興味・関心がある。	1	2	3	4
44	英語ができればグローバルな社会で働くことができるので、英語の勉強は大切だ。	1	2	3	4
45	英語力がないと学力が低いと思われるので、英語の勉強は大切だ。	1	2	3	4
46	英語圏の人々のことについてもっと知りたい。	1	2	3	4
47	将来英語圏に住みたい。	1	2	3	4
48	親が英会話学校等に行くことを勧めている。	1	2	3	4
49	英語を学ぶことを楽しんでいる。	1	2	3	4
50	英語で道を聞かれると緊張する。	1	2	3	4
51	授業で英語をもっと使いたい。	1	2	3	4
52	私は問題に直面しても、いつもいくつかの解決策を見つけることができる。	1	2	3	4

Part 2 本学の英語教育に関してどのようなことをして欲しいと考えていますか。なるべく具体的に書いて下さい。

Part 3 英語学習動機の変化

あなたが小学校の頃から現在に至るまでの間でどのように英語学習動機（モチベーション）が変化しましたか？あなたの英語に対するモチベーションが**ピーク**となった時を**最高値（笑顔マーク）**に、モチベーションが**最低**となった時を**最低値（泣き顔マーク）**にして、線グラフで描いて下さい。また、その理由を選んで下さい。

(例)



ピーク						
						
						
						
最低						
		小学校 入学	中学校 入学	高校 入学	大学 入学	現在

英語学習動機の変化の理由

英語学習に対するモチベーションが**ピーク**となったきっかけや理由は何ですか？数字を○で囲んで下さい（複数回答可）。

- | | |
|-------------------------|------------------------------------|
| 1. 学校で英語科目の授業が始まったから | 2. 学校で英語を勉強して楽しくなったから |
| 3. 受験で必要だったから | 4. 海外旅行に行って、英語ができるようになりたくなったから |
| 5. 好きになドラマ、映画、歌などが英語だから | 6. 大学に進学したから |
| 7. 留学したいから | 8. 英語の先生がよかったから |
| 9. 塾や予備校で学んだから | 10. 留学したから |
| 11. テストで点数が良かったから | 12. 資格試験（英検など）を受けるようになった、または合格したから |
| 13. 英語の勉強の仕方がわかったから | 14. その他（具体的に記載して下さい） |

英語学習に対するモチベーションが**最低**となったきっかけや理由は何ですか？数字を○で囲んで下さい（複数回答可）。

- | | |
|--------------------------|-----------------------------------|
| 1. 学校で英語科目の授業が始まったから | 2. 学校で英語を勉強して楽しくなくなり、苦手だとわかったから |
| 3. 受験勉強が終わったから | 4. 海外旅行に行った時、ジェスチャーや翻訳機で十分だと思ったから |
| 5. 受験勉強が始まったから | 6. 英語のテストの点数が悪かったから |
| 7. 英語自体に興味がなくなったから | 8. 大学に進学し、他の勉強の方により興味が出てきたから |
| 9. 留学がなくなってしまったから | 10. 英語の先生がよくなかったから |
| 11. 塾や予備校で学んだから | 12. 英語の勉強の仕方がわからなくなったから |
| 13. 資格試験(英検など)で不合格になったから | 14. その他（具体的に記載して下さい） |

質問紙は以上です。ご協力ありがとうございました。